

エ　　ー　　ゲ　　海　　物　　語

イリアス・ヴェネージス

岡　　野　　純　　訳

島にある高い山のそのあたりは乾燥していて樹が見られない。生えているのは灌木だけである。この附近に多い巨大な岩から石の破片が幾つも剝がれ落ちて、大きな響きをあげながら海に向つてころがり込む。荒野はその反響を受けとめて自分の中に飲み込んでしまう。するとすべては再び静寂に帰る。そのあと変つた出来事と言えば夜が訪れてくるくらいのことなのである。

樹木の生えてないこの傾斜地に一つの小屋がある。その中に一人の女と一人の子供が住んでいる。女は昼間は下の方、海のそばの畑で働く。子供は生まれながらの盲目である。子供がまだずつと小さかつた時、その子を女と一緒に仕事に連れて出た。木の根かたに倚せかけて、遊ぶために何でもそこらにあるものを子供の前に置いてやつた。海浜で見つけた小石や、鳥賊の甲や、コルクの小さな切れはしなどである。彼女は土地を耕しては、仕事のあいまに時々手を空けて、子供が何をしているかを見るために走り寄つた。子供は母親の足音を耳にして嬉しげな声を出した。すべての人の足音の中から母親のそれを聞き分けることができたからである。彼はいろいろの音を聞き分け、目の見える者にはできないほど沢山の響きを聞くことができた。木蔭で待つていたくてもならないこの長い時間、小石で遊ぶことにも倦きてくると、彼は身動きもせず木に寄りかかつたままではいるのだつた。頭の上では蟬が鳴き、鳥があわただしく飛びかすめ、下の方では海の浪の砕ける音が聞えた……。孤独の中で彼を満したこれらの多様な一切の音と反響が一体いかなる意味をもつかという懷疑が次第に彼の心の中に生じ始め、長ずるにつれて一層解き難いものとなつて行くのであつた。

ある日、彼は母親に、大地は非常に大きいものであるか、その上に住む人間はどれくらいいるものかと訊ねた。

彼女はどうやつて、空間と多数の概念を与えてやつたらいいものか、わからなかつた。

「ここから出かけるとしてね、坊や」と彼女は言つた。「昼も夜も、幾日も幾晩も歩くの。ど

こまでも歩いて、それでも決して行きつかない。大地とはそんなに広いものなのよ。」

「そして人間は？」と少年は訊ねた。

彼女は子供を、穂の揺れている広い畑に連れて行つた。身体がその中に隠れるほど押しやつて、その小さい指を、穂の一粒一粒の上に持つて行つた。

「この穂は果てしがないのよ」と子供に言つた。「大地のようにね。一粒の穂が一人の人間なの。人間はそれほど沢山いるのよ。」

そう言つたあと母親は仕事をするためにまたそこを離れた。そこで子供は一人ぼっちになって、惑乱した脳の中で、耳に聞える無数の響きから事物の無数の姿を捉えるために努力するのであつた。

夏の夜な夜な母と子は小屋の外でしばし睡らずに過すのが常であつた。星は二人の上でまたたき、静寂の森の中で虫がころころと鳴くのが聞えた。子供は夜とはどんなものか、星とはどんなものかと訊ねた。母親は何と言つていいかもわからなかつた—— 比較の拠り所がなかつたからである。あたりはすべて真黒で、ただ高い所で、限りない深みで、何千という開いた眼が下界の静かな大地を見つめているのだと言つた。

しかし子供には何も理解できなかつた。彼にとっては、色も、星も、大海もわからないままであつた。

「ものを見ることができたらね、母さん」と彼は言つた。

彼女の眼はその時、涙で一杯になつた。しかしそれと知られないように、睫毛の涙が乾くまでものを言わなかつた。

子供は小さい時から祈ることを教えられていた。毎晩、手を十字に組んで、神様が彼に光を与えて下さるように、海で溺れ死んだ父親のために、そして世の人々のために祈つた…………。

ある日、彼は母親に訊ねた。

「すべての人のために祈るの、母さん？」

「そうよ、坊や」と母親は答えた。「すべての人が私達と同じように苦しみ悩んでいるからなのよ。」

「すべての人が？ だれでもがそうなの、母さん？」と子供は執拗に訊ねた。

その時、母親は、いつまでも真実を隠しておこうとは思わなかつた。

「みんながではないのよ、坊や」と彼女は言つた。「なぜつて、この世には苦しみを与える人もいるのだから…………」

そしてその時から彼の祈りは変つた。彼は、母親のため、父親のため、自分が持たない光のため

そして苦しみを受ける人々のために祈った・・・・・

こうして、エーゲ海の中に聳えた、灌木だけが生えている大きい山の荒れた傾斜地に建てられた小屋に幾歳月かが巡った。

島にとって呪われた年が来た。雨期に一滴の雨さえ降らず、村々では雨乞いの儀式をしたが黒い雲は空を掩わなかつた。そして春が来た時、大地は穀物を生ぜず、牧場は草を生やさなかつた。その時大きい不幸が人間と生物の上に降つて来た。その多くが相ついで死んで行つた。夜になると、その地方一帯では飢えた羊群の鳴き声が遠くまでこだました。むつかる赤子が泣くように、この限りない悲しみは畑に満ち、海の中にまろび込んで消えて行くのであつた。一人の羊飼がある夜、深い井戸に落ちて溺れ死んだ。彼は嘆きの声をこれ以上聞くに耐えなかつたのである。羊たちは舟に乘せられてトラキアへ移動しはじめた。そこで草を食むためにである。しかし数日にして仲間の多くを失つて戻つて来た。というのはその地方は他郷の羊の場陸を許さず、役人どもがトラキアの海岸に陣どつてその上陸を遮つたからである。

その時、村の多くの者は、必要にせまられて土地を捨て、仕事と食物を見つけるために島の大きな都邑へと降りて行きはじめた。道のりは歩いておよそ四日かかつた。パンを見つけるため出発する家族たちの輓馬車で道は溢れた。夜は荒野に宿営をつくり、かがり火を燃やした。彼らは自分たちの運命と、あとに残した自分たちの土地を嘆いた。

「私たちはどうなるのかしら？」と女たちは言い、悲愁の歌を歌つた。

そして年上の者たちは、このような腹立たしいことは今までなかつたと言つた。

こうした輓馬車の一つで、盲目の子を持つたあの母親も出発したのである。

大きい都邑に着いた時、彼らはある旅籠屋に馬を休めた。ある者たちは道路や港や工場に仕事を見つけた。ある者たちは仲々見つけれなかつた。盲目の子を連れた女は、はじめ数日、彼女を憐れんでくれた他人の助けて命をつないだが、彼女も道路の石割りをするという仕事を始めた。

辛い仕事だつた。町はずれの修理すべき道路に時間に間に合うよう着くために、夜明けに家を出る。大きな石が道路の端に一つずつ並べられる。始めはハンマーがうまく正確に当たらない。指を打つこともある。太陽が身体を焼き、頭はがんがんと鳴り、打たれた指から流れる血はたちまち凝固する。こうして一センチ一センチ、汗の一滴一滴ごとに、砕かれた石の長い線が、つぎつぎと並べられ、次第に延びて行く・・・・・。人や旅人や車が通りかかり、通り去つて行く。たまには憐み深い、美しい心を持つた人が通りすぎることもある。彼らは、石を砕く女たちを見て

『まあ、可哀そうに！』とは言う。だが彼らも車の中に納まつたまま、ゆつくりと行つてしまふ・
……。すべてが通り去つて、道路の長い線の上には石と一緒にこね合わされたか弱い心のほかに
は何も残るものはないのだ……。

旅籠屋にはさまざまな人がいた。アルメニア人，ユダヤ人，キリスト教徒，子供，女。盲目の少年は一日中、庭にいて、母親の戻る夕方を待たねばならない。道は遠くて、母親について行くわけにはいかないからである。

ある日のこと、旅籠屋に或一座が来泊した。彼らは一つの籠に一羽の鷲を、もう一つの籠に訓練された幾匹かの蛇を持ち、腰からは猿のように毛の生えた女を連れていた。彼らはじつくりと腰を据え、都邑の中で、今日はここ、明日はあそこと急ごしらえの天幕を張つて、見せものをした。いい商売になつた。

夕方になると、旅籠屋に泊っている者たちはみな、寝床にはいるまで庭に集つた。彼らは自分たちの労苦を語り合うのだ——そして蛇を持つて世界を巡歴して来た一座の連中は遠い国々や大きい海についての話をした。

ある日、一座の一人が母親に言つた。

「子供をわしらのところに寄こさないかね？　こんなにしてほつといたら、いつかいなくなるよ。蛇と遊ぶことを教えてやるし、世話もみてやる、食べさせてもやるよ。そして夕方にはお前さんの所へ連れて来てやるよ。どうだね？」

彼女は同意しなかつた。ところがある晩、彼女が仕事から戻つてみると、子供の姿が庭になかつた。木戸から出て、いなくなつたのである。

驚ろいた母親は道路に走り出て暗い中を子供を捜した。

朝早く人が見つけて彼女のもとへ連れて来てくれた。ある家の戸口に倒れたまま眠りこんでいたのが見つかつたのである。

そこで彼女は子供を、昼間、蛇を持つた人たちにあずけることを承諾した。

彼らは子供に蛇を首に巻くことや手に巻くことを教えた。また舌を出すように指で蛇の口を叩くことも教えた。

はじめ彼は、皮膚の上をはいずつて行くものが冷いものだと母親に話した。恐ろしいと思つた。しかしだんだんそれについて話すのを止めるようになってつた。母親は子供を撫でながら、またいなくなるよりはこうしている方がずっといいと言つた。子供も、そうだ、この方がいいと言つた……。

彼女は一日中、自分の傍に、蛇を見に来る人たちの声を聞いた。大きな声、かん高い声、低い声

それに見物に連れて来られた子供らもいた。盲目の子は話もせず泣きもしなかつた。彼はもう機械的に、その動作を、つまり蛇が舌を出すように首に巻きつけられた蛇の口を小さな指で叩くことをおぼえ込んだ。その時見ていたほかの子供らは、つんざくような、ふるえあがつた、おどろきで一杯の声をあげた。盲目の子は指で遊ぶことを一時やめ、ほかの見物の群が集まるとまた蛇の舌での演技を始めるのだつた。

指によるこの動作は一旦始まると、それは何度も何度も間断なしに自然に繰返された……。それは彼の生活の中に入り込んでいた。そして母親が手を子供の首に巻いて眠りについたある夜彼女は自分のむき出しの腕の上を小さな指がかすかに叩いているのを感じた……。

彼女はその意味がわかった、眠っている子の頭の上でさめざめと泣いた。

ヴェネージスについて

1963年度のノーベル賞を受賞した現代ギリシャの詩人セフエリスについてはすでに前号で述べたが、現代ギリシアにはすぐれた詩人がいるばかりでなく、立派な散文作家も存在している。ギリシアの文学史やアンソロジー（選集）のたぐいをくくと、たちどころに数十人の現代ギリシア小説家の名前を拾い出すことができる。その詳細を述べる暇はないが、イタリアのカンパニス著『近代ギリシア文学史』中の現代文学（1935年以降）を扱った章を見ると、散文作家の代表としてヴェネージス、ミリヴィーリス、テルザーキス、セオトカース、ユズマス・ポリーティス、カラガーツイスの6人の名がまず挙げられている。「エーゲ海物語」の作者ヴェネージスの名はその筆頭に掲げられているのである。以て彼に対する評価の高さが窺われようというもので、ヴェネージスこそは当代一流の小説家だと断言することができる。

イリアス・ヴェネージスは1904年に小アジア海岸のアイヴアリに生まれた。第一次大戦（1914～18）の結果、ギリシアとトルコは互に領土内の住民を交換することになり、ヴェネージス一家も住みなれた父祖の地を捨てなくてはならなくなり、苦しい抑留生活のあと1923年アテネに引揚げた。彼はギリシア銀行の行員となり、傍ら小説家として身を立てるようになった。第二次大戦では独軍占領下に抵抗派文学者として活躍、ついにナチスに捕えられて死刑の宣告を受けたが、アテネの勇敢な知識層の抗議によつて辛くも難をまぬがれたのである。戦後、文部大臣よりギリシア大文学賞を授けられた。

ヴェネージスの作品には、少年時代に送つた小アジアの土地と、苦しかつた抑留生活・引揚げ

者の体験が最もよく扱われている。「31328」（1931）はトルコの捕囚となつて強制労働に服した時の苦難の自叙伝であり、「静寂」（1937）はアツティカの石ころだらけの荒蕪地に入植した小アジアからの移住者たちの生活を描いた作品である。短篇小説集「エーゲ海」（1941）でも同種のテーマが多く追求されている。「アイオリスの土」（1943）は、ギリシア人が数千年住みならわし、ヴェネージス自身が幼少期を送り、しかも今や永久に捨て去らねばならなくなつた小アジア海岸の故郷における、人間の純愛と、自然の尊美さと、さらに人間と動物や自然との交感の思い出を描いた牧歌的とも言ふべき物語りである。これはヴェネージスの代表作であつて、すでに英、独、仏をはじめスウェーデン、イタリア、オランダ、ユーゴスラヴィア其他の言語に翻訳されている。このほか多くの作品が作られているが、ここに訳出された「エーゲ海物語」もその一つで、1934年に発表されたもの。短篇ながらも不毛なエーゲ海の一島嶼に住む母と子の哀れな運命の叙述を通して、ヴェネージスの作風と彼の追求する主題の一端をうかがうことができる。

（J. O.）

が わ っ ば 物 語

—長 崎 県 民 話（その2）—

横 山 悌 志

今回は、ぼくらの地方に伝わる河童の話をしよう。ぼくらの幼ない頃は小川や堤に泳ぎに行く時は、カッパから足を引かれないように、と注意されたものである。

おじ、今夜もまたなんかおもしろか話ばきかせんな。うゝんよしよし、そいでんおまいのごと話のしいた子はめづらしかばい。そぎやん云うぎと、今夜は何の話ばしうかにや。おゝそうたいおまや（おまえは）がわつば知つとるきや？ 知らんつてや、おじじもまあだ見たこた（<towa）なかと。ないどんがわつばは、水の中きやおつてにや、人間の尻ごはとつて喰うつちうう話たい。そいせん人間が、がわつばからとらるるぎん（とられたら）、しんのす（肛門）のポーンとすると、ほぐつとたい、（穴があくのだ）なんて！ がわつばは、今でん居るかつてや、おるおる、言う